峠道利用の阿讃交渉関係序説

福　井　好　行

(1)

阿波と讃岐は，明治以後徳島県と香川県に改まったが，その境は阿讃山脈となっている。両県は南と北に地続きをなし，しかも近接しているので古来から交渉関係が頗る密接であった。

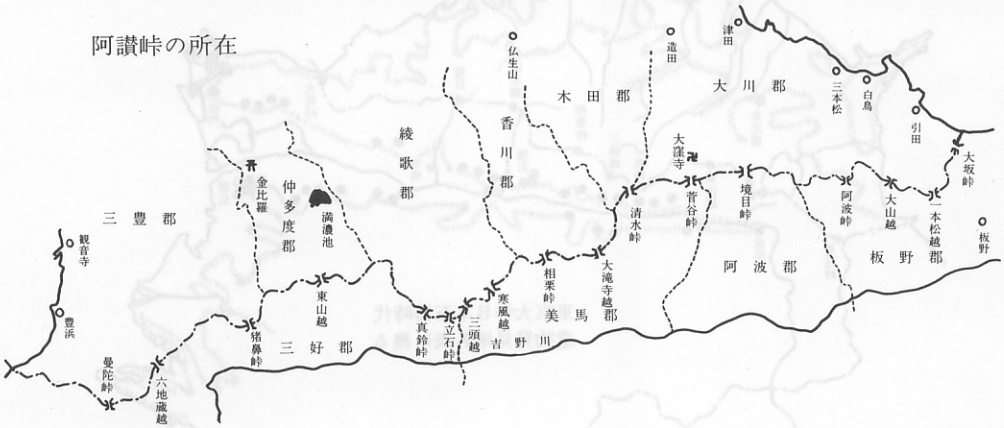
勿論，明治35年大阪商船株式会社によって，淡路―撫養―高松の定期沿岸航路が開設せられ 200屯前後の加古川丸・生田川丸・千草丸が就航するようになり，大正三年三月には摂陽商船が交代して，白鳥丸，眉山丸・摂州丸，華城丸など 350屯― 400屯の船が往復して，大正15年高松，津田間の汽車開通によって，三本松，引田間の開設と共に廃せらるまで運賃の低廉と大量輸送によって沿岸住民に利用されたが，ここでは，阿讃山脈をはさんで南がわの徳島県（阿波）と北側の香川県（讃岐）との交渉を「峠道利用」の角度から眺めてみたいと思うのである。

(2)

山脈を越える場合，普通はなるべく労力の少い低い場所を使用するのが自然である。そこに峠道の利用が考えられる。

阿波と讃岐の国境は，幅約12㎞，長さ約90㎞の阿讃山脈が東西に走っており，その中でも高いのが1057ｍの龍王山，次に高いのが1043ｍの大川山（だいせん）で，山脈の平均高度はほゞ 500ｍになっている。この阿讃山脈は南側にも北側（香川県側）にも断層を示す地塁山脈で,和泉砂岩と頁岩の互層から成っており，浸蝕に対する抵抗力が弱いために，山脈から流れ出るる川はＶ字型の谷を形成して，各谷口には扇状地を拡げている。前述のように低い山脈であるから阿波と讃岐の交渉は山地を横断する自然的通路を低い峠道に求めて始められたと考えられる。大瀧山や大川神社参拝のため南北から登山する人々の路もあって，現在知ら

阿讃峠の所在



れる峠道を，五万分ノ一地形図上で捜すと，一本松越・大山越・御所谷越・境目峠・菅谷越・大瀧山越・相栗峠・寒風峠・滝ノ奥越・大川山越・真鈴峠・樫ノ休場越・東山越・六地蔵越・曼陀峠などが見え，その他，無名の通路を合わすとほゞ40個所があげられるが，特に東では大阪峠（189 m）西部では猪鼻峠（543.4 m）中央部では清水越（450 m）が最もよく利用されたようである。尚この他にも，三頭越が徳島県の美馬郡（貞光・半田・郡里）地方から琴平参りに盛んに使われたこと，荒岡一夫氏の「阿波北方の民俗・中編」に明らかにされている。

(3)

是れらの道は石器時代から利用された。それは香川県坂出市城山や五色台附近特産のサヌカイト（Sanu Kite）—俗称カンカン石で作られた石器・石屑が阿讃山脈南側の徳島県に多く発見されることが確証である。四国島内では讃岐にしか得られない紫蘇輝石安山岩のこの細密な讃岐石は唯一の石器の材料として愛用されたもので，阿波発見の石器には稀に燧石のものもある。）それが阿波国に発見されるのは太古既に阿讃の交通が見られたことが推察される。

我国海上交通の孔道である瀬戸内海に直面した讃岐は吉備の勢力と関係頗る深かったことは壮大な古墳の分布や出土品の質と量の上から断定できるが大和朝廷の勢力発展と共に地方統治の必要から国司・郡司の制をはじめ貢租を上る必要や国分寺・国分尼寺の創設は，当然大和地方と阿波・讃岐の交通を生じた。島国の四国ではどうしても海を渡らねばならなかったが当時の造船技術や航海法では沿岸交通に限られた。そこに，延喜式兵部省の項に見える官道の駅馬・伝馬の施設が見られたわけであるが，淡路養宜の国府から鳴門の瀬戸を渡りムヤの港に上陸して阿讃山脈の南麓を西に進み，石濃（今・鳴門市堀江町石園）郡頭（今・板野郡板野町大寺）の両駅を越えて阿波の国府へ行くには南折し，讃岐国府へ志すときは大坂峠を北に越えて讃岐に入ったので，（字馬宿は古の引田駅）この道は鎌倉

阿波に於けるサヌカイト石器石屑出上分布図

時代の仁治4年（1243）高野の学僧道範阿闍梨が罪を得て讃岐に流されたとき，往路にも，復路にもこの道をとったこと，彼の自記する「南海流浪記」（群書類従所収）に記されてある。

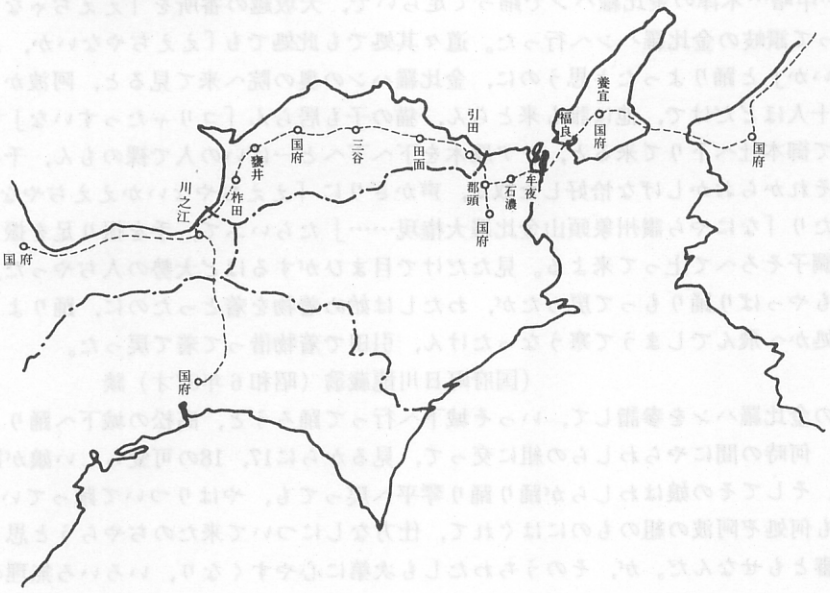
更に平家物語や源平盛衰記を見ると，源平合戦のとき，一ノ谷で敗れた平家は讃岐屋島に據ったので，追討する源義経は僅かばかりの部下（150騎）をつれ，摂津渡辺の浦（今，大阪市福島のあたり）を乗船，疾風怒濤を衝いて，阿波のカツウラに上陸（その地点に就いては諸説あり）従わぬ者を打破って吉野川を渡り，古の官道大坂峠を打越えて讃岐に攻め入り屋島檀浦の合戦となった。

鎌倉幕府の北條氏倒れて一旦建武中興となったが足利尊氏の反によって天下再び乱れ九州から東上する尊氏は瀬戸内の重要性に着眼して阿波・讃岐には腹心の細川氏を遣わした。細川和氏・頼春は阿波国秋月庄（今板野郡土成町）に入部して四国経営の本據とした。(後に板野郡勝瑞に移る）従って一族の據る讃岐，特に宇多津とは阿讃山脈を一つ越えて近接する位置の上から関係が一層深まった。守護大名，戦国大名としての細川氏の勢力は頗る強盛で室町幕府三管領の随一としての力も阿讃両国を掩有したことが一因である。しかしやがて下剋上の世の中となり土佐の長宗我部の崛起から四国全土は土佐軍に占領される。

これより先，阿波勝瑞の権臣三好実休の次男存保（まさやす）は讃岐十河城に入って十河存保と称し智勇・謀略を以て鳴ったが勝瑞城主で兄の三好長治が長原で敗北したので阿波屋形を継ぐ者がなかった故に，阿波の諸将に迎えられて勝瑞に帰り城主となった。阿波三好氏恩顧の者集り来って万歳を叫んだという。（南海通記）ここに阿波・讃岐の兵将は多く三好存保に属するようになった。実に香西成資のいう「讃州・阿州は同胞の国地」が真実であることが窺われる。

同じ南海通記巻の十三には「阿州より讃州へ起る路程」として

南海道の官道



大坂越　阿州蕗田（今，板野町吹田）より讃州引田は三里，引田より高松へ九里
大山越　阿州宮河内より讃州中山へ三里，中山より志度へ六里
神内越　阿州切畠より讃州植田へ三里，植田より屋島へ四里
大瀧寺越　阿州脇町より同枝町へ三里，枝町より讃州安原へ三里
中通越　阿州大西（今三好郡池田町）より讃州増須へ六里，増須より西尾へ三里
山脇越　阿州大西より讃州藤目へ六里，藤目より国亀（丸亀）へ六里
財田越　阿州大西貞光より讃州財田石野へ三里，白地（はくち）より財田へは六里
海老救越　阿州大西白地より讃州和田へ三里，和田より柞田へ四里

右の外，山越の道ありと云へども荷馬の通らざる路は事に益なし。と見えており，事あるときには無数の人馬兵糧がこれ等峠道を通って阿讃を強く結んでいたことが知られる。阿波屋形勝瑞城も中富川の激戦で長宗我部に敗れ，十河存保は再び讃岐に退隠して虎丸城（三本松の西南）に據ったが秀吉の四国征伐となり浮田・蜂須賀・黒田の軍は讃岐屋島に上陸して大坂越で阿波に入り本軍と合した。

(4)

江戸幕末に際して全国に「ええぢゃないか」の騒ぎが起ったが，その前後五回のうち文政13年（1830―天保元年）に起った騒動は，阿波に始まったもので，山口吉一著「阿波えーえぢやないか」には阿讃の関係を示すものがあるので抽記してみる。

木津（鳴門市撫養町）の金比羅ハンへ来て見ると，此処もげうさん踊りよった。「わしら勢見（徳島市）の金比羅ハンから来たんぞう」ちゅうたら「ほうか，よう来た，よう来た」ちうて皆が喜んで呉れたけん，夢中になって踊りよったら，また誰やら「金比羅ハンへ行かんか？」ちう。金比羅ハンちうたら此処じやけん，今度は宮島（川内村）の金比羅ハンぢゃらうと思うて「宮島のか」ちうたら，「ううん，讃岐のぢゃ」ッちう。ちっと遠いなと思うたけんど，なんでもええぢゃないかで，たうたう讃岐の金比羅ハンへ行った。…中略…木津の金比羅ハンで踊って足らいで，大坂越の番所を「ええぢゃないか」と通って讃岐の金比羅ハンへ行った。道々其処でも此処でも「ええぢやないか，ええぢやないか」と踊りよったと思うのに，金比羅ハンの奥の院へ来て見ると，阿波から行った三十人ほどだけで，他に誰も来とらん，猫の子も居らん「コリャたっすいな」と思ひもって御本社へ下りて来ると，サア雁木を下へ下へと一ぱいの人で裸のもん，千早のもん・それからおかしげな恰好した奴が，声かぎりに「ええぢやないかええぢやないか」ちうたり「なにやら讃州象頭山金比羅大権現……」たらいふて，手を振り足を振りもって，調子そろへて上って来よる。見ただけで目まひがするほど大勢の人ぢやった。

戻りもやっぱり踊りもって戻ったが，わたしは始め着物を着とったのに，踊りよるうちに何処かへ飛んでしまうて寒うなったけん，引田で着物借って着て戻った。

（国府町日川龍蔵翁（昭和６年87才）談

讃州の金比羅ハンを参詣して，いっそ城下へ行って踊ろうと，高松の城下へ踊りこんだとき，何時の間にやらわしらの組に交って，見るからに17，18の可愛らしい娘が踊っていた。そしてその娘はわしらが踊り踊り琴平へ戻っても，やはりついて踊っている。わしらも何処ぞ阿波の組のものにはぐれて，仕方なしについて来たのぢやらうと思うて格別不審ともせなんだ。が，そのうちわたしも次第に心やすくなり，いろいろ無理のいひ

やいしやいをしておったが，箸蔵を越えて阿波へはいり，だんだん川田(麻植郡山川町)あたりまで戻って来て，ひよッと気がつくとその娘がしくしく泣いている。わしは吃驚してどうしたのかと聞いて見ると，なんとその娘は高松のもんぢや。わしは暫らく開いた口がふさがらなんだ。というて，そのまま放っておく訳にも行かぬので，慰めたりなだめたりしてとにかくわしの家へ連れて戻った。というのも，もともとそのうち(主家)は蠟燭の商売をしているから，高松へは度々集金などの用があるので，いづれ送り届ける折があると思うたからで外に考へがあったんぢゃない。それから四・五日もして踊も止まり，世間が静かにおさまったから，その娘を連れて船で高松へ届けたが，娘のうちは割に大きな呉服屋であった。そんな事があって一月二月も後になって，高松の得意先の人が来てわしに嫁を貰はぬかという。わしは高松のような遠方から貰はなくともと思うたが，その人が是非にと勧めてくれるので，よく話を聞いてみると，その嫁というのが前の踊りの時の娘なんぢや，わしもそうと判れば何となくその娘が恋しうなって親爺に貰うてくれと頼むと親仁もひらけていたと見え，ぢき許して呉れ，花嫁花婿でめでたく式を挙げたのぢやが，後で聞くと母親は少し反対したそうな。今のあの皺苦茶の婆さんが，その時の娘ぢや。おかげで二人共長生しとるが，わしはこれがほんまの御降りものぢやと思うわい

(東富田高木源助翁（昭和六年現在80歳）談

(5)

阿讃山脈を越えた通婚現象は香川大学合田栄作教授の研究で知られるが，徳島県美馬郡美馬町を中心とした荒岡一夫氏の調査研究もある。それは主として三頭越（さんとうごえ）・相栗峠を南北に挿んでの交渉であるが美馬町字野田ノ井から香川県（特に琴南町）へ縁づいた人は養子に行った人７，嫁に行った人53を数え（昭和42年現在数）総計60人を示している。これをそれ以前の明治時代８，大正時代９，昭和20年頃までの26人に比べると，時代を追って逐次増加の現象が窺われる。

一方，香川県からこの両峠を越えて来た人は，明治時代３，大正時代５，昭和20年頃まで11となり戦後，昭和42長までには養子に来た人４，嫁に来た人11計15人となっており，別に香川県から引越して来た戸数２戸が挙げられている。

香川県から南の徳島県へ移入した人も漸増の傾向を見せているが，これは交通の発達に要因が求められよう。

然し出と入と差引すると出の多いのは徳島県側は山地が多くて土地の生産力が低いのに対し香川県側はそれよりも高く従って生活の利便が優れているからではないだろうか。

更に，相栗峠附近の状況に就いても克明な調査がなされているが，この峠（575 m）の南側美馬町郡里山字清田・丈寄の二部落の戸数計58戸中，讃岐と縁組した数は33戸で，「約６割が香川県と親族関係である」香川県へ嫁に行った人は29養子に出た人７で，此方へ来た人は嫁で15，養子は５となっており，此処でも，香川県へ出て行った人が多い数字となつている。

荒岡氏は以上の調査に基き結論として，野田井，清田，丈寄では

1　約半数の戸数が讃岐と縁組している。

2　讃岐へ養子・嫁として出て行っている人が多い

3　家族のなかに２人・３人と続いて越境の縁組が相当数に上っており，中には親子三代に互っている家もある。
4　峠の両側で最も多く結ばれている。
5　阿讃山麓のうち里分の他部落に就いて調査しても必ず数戸の縁組が分布している。
とされている。

この通婚現象の他に，移住して遂に香川で死没した人もあった筈で，歴史上有名な君田（くんでん）美馬援造〔文化９年（1812）一明治７年（1874）〕の如きもその１人である。彼れは美馬郡重清村に生れ，郡里村の願勝寺で僧となったが，米艦が浦賀に来り国内騒然となると還俗して諸方に周遊し，尊王攘夷論を盛んに鼓吹して讃岐琴平に移住し，高杉晋作・日柳燕石・坂本龍馬等と交り皇威振興を計ったが，慶応元年（1865）日柳燕石と共に捕えられ在獄４年の後，漸く明治元年（1868）赦免となったが，以後琴平で塾を開いて諸生を教えた。其墓は琴平町西山墓地にある。

四国霊場第八十八番の札所大窪寺が大川郡長尾町字多和にあって巡拝を了えた四国巡礼は阿讃山脈の峠道を南に越えて阿波国市場町に出て淡路沿岸伝いに阪神地方え帰る者もあり，逆打ちをする者もあったから巡礼の峠道利用も多かったといえる。

徳島藩では阿讃の峠道利用者を関所（御番所と呼んだ）を設けて国境の警備，防備を第一に，咎人（とがにん）や怪しい者の出入の監視，国禁の特産物（例えば甘蔗，藍，楮皮など）持込・持出の検査，国外逃亡，逃散人の取締り，或いは附近の木材の濫伐監視，不思議者の出入りを監視した。阿波藩民政資料下巻2453頁には「讃岐境の御番所」として板野郡大坂口，阿波郡日開谷，大影大奈良，美馬郡曾江口，三好郡朧口，佐野の六個所に番所があったことが記され，続いて「西筋より東へ順々」として次のように列挙している。

三好郡佐野村曼陀ヶ峰　佐野村雲辺寺越　讃州海老野村雲辺寺越　讃州栗井村　讃州河内村
同郡西山村　州津村箸蔵寺越　同郡昼間村越　太刀野山越　讃州財田村中の村　讃州山脇村　讃州塩入村
同郡加茂宮村　朧口越　讃州内海村
美馬郡大瀧越　讃州上安原村　同岩倉山越　讃州敷合村　同曾江山口　讃州奥山村　曾江山口　讃州中山村　真川村
阿波郡大影村　仝国五名村　日開谷口　同国田面（たずら）村　大奈良越　同国入野山村
板野郡宮河内村　同西山村
板野郡神宅村大山越　同伊川村　東山川紋村
板野郡吹田村大坂峠　同坂本村
是より東分，北筋海辺御国分八ヶ浦あり　以上

と見え，以上13ヶ個所が阿讃の通路として使用されていたことが知られる。尚又仝書上巻163頁には慶安二年（1649）５月の覚書として「讃州御領分より参者（まいるもの）に付覚書」が記載され，讃岐から阿波，淡路え来る者が多かったことを示している。

(6)

阿讃の関係において，家畜労働力の移動として美馬三好地方の借耕牛（かりこうし）も逸することは出来ない。美馬，三好郡地方で「米牛（こめうし）」と俗称される此の習慣は，江戸中期から始まったと

いわれるが，香川県地方へ阿讃山脈を越えて定期的に移動出稼ぎさせる風習である。

農耕役牛は一年中需要するものではないので，春秋の二季，（田植期と収穫期）美馬・三好両郡の山分で水田に乏しい山村農家が，自家飼育の役牛を農耕用として香川農家へ貸し，帰る時もって帰るおいしい「讃岐米」は山村住民にとっては貴重なものであった。明治時代に入って急激に増大し昭和12・3年頃まで毎年約 4,000頭が出稼したといわれ，それは美馬三好両郡飼育の牛の頭数の約半数に当った。第二次大戦前には約 3,500頭に減り，昭和45年現在では約 500頭で漸減の傾向にあるという。それは，香川県農村の機械化が進み，牛を必要としなくなったからであるが，元来この借耕牛の出稼現象が見られた原因は阿・讃の農繁期が時期的にズレているのが主因で，阿波の山分の田植がすんでから讃岐の田植えに，阿波の麦蒔がすんでから讃岐の麦蒔きにと，時期的に都合がよかったからである。又，讃岐では開拓が行き届き牛を飼育するのに必要な牧草が乏しく，加えて農家一戸当りの耕地面積が零細であるから牛を飼うていなかったということが考えられる。

借耕牛賃貸料は春は6月上旬から7月の半夏（はんげ）の頃まで1ヶ月間，秋は11月上旬から12月上旬までの1ヶ月間で，昔しは玄米で米二俵（8斗）の現物を背に積んで帰ったが現在は現金で取引されている。春は1ヶ月間，丈夫な牛で最高 9,000円～最低 4.000円位で秋1ヶ月は，強い牛で 8,000円弱い牛で約 4,000円が相場という。

貸方の阿波農家と，借り方の讃岐農家の間に入って牛の仲介する博労を美馬郡地方では俗称「といや」と呼んでいる。このといやが中に立って牛を連れて行く場所と日時を決めるわけであるが，三頭越をする阿波の牛は讃岐の「犬の馬場」で，三好郡地方の牛は博労の手で，県境の「樫（かし）の休場（やすみば）」（ 851 m ）で受渡しされた。

讃岐に賃貸しされた米牛の中には酷使されて痩せさらばえて帰ったものもあるという。

尚，此他に砂糖生産の盛んであった香川県え甘蔗締めのため出稼に出た牛もあり，その報酬として甘蔗（さとうきび）を背に負うて帰ったから「キビ牛」とも呼ばれた。

(7)

食塩と綿が盛んに阿波に運び込まれたのも阿讃の交渉関係を考える一材料である。

寿司米としての讃岐米が阿波に移入されるのは暫く措き古来「讃岐三白」と呼ばれた綿・砂糖・塩のうち，西讃地方の綿・塩（多度津丸亀）が阿波の西方特に三好郡地方に運ばれたことは今にその物語りを残している。多度津方面から阿波の西部に入る塩は，今の仲多度郡仲南町に字「塩入り」の地名を残しているように，阿波西方山分に住む人々は，西讃地方から運び込まれる塩の移存度が高かった。その塩の移入道筋として人々に知られていたのである。食塩が人類生活に不可欠の食品であること周知の通りで，筆者が且て東祖谷山村落合の栃溝貞蔵氏（文久三年〈1863〉生）に直接聞いた談話によると，栃溝氏の壮い頃，祖谷山に住む人々の味噌・醤油・漬物の材料としての塩は，殆んどすべて讃岐から運ばれた。落合―落合峠―深淵―桟敷峠―鍛治屋敷―昼間―塩入のルートを使って豆好郡三加茂や昼間の仲継店（問屋で卸売を兼ねる）を経て，祖谷山の産物と交換した。山の生産物を朝暗いうちから背負うて山を下り，一夜泊って翌日，塩俵をかついで山に帰った。厳冬の折りには山道が凍って氷のためツルツル滑って危険であったが，塩は必要品だから毎年，大正9年祖谷街道の開通するまで，塩俵を担いで落合に帰ったという。阿波の東部海岸にも製塩地があったけれども，西讃地方が距離的に近いため阿讃の峠道を越えて阿波に

入ったわけで，吉野川上流地方の各山分も，恐らくは略々同様であったであろうことが推察される。

衣料原料としての綿も同様で，古来,（特に室町期以後）瀬戸内海沿岸各地は気候的に棉作に適したため，広く栽培され，諸藩主も殖産興業のため保護奨励を加え「讃岐三白」の一に挙げられた程であった。明治中期以後，外国綿の輸入に押されて姿を消したが，讃岐保多織の原料にも使われた。

特に西讃地方では，米の裏作としての棉栽培が盛んで，集荷された綿は東予の今治地方や，西部阿波へ送られた。この綿を原料とする木綿織物が山村農家で自給的に織られ，ほとんど各地で生産された。

勿論，現今の大資本組織に見られるようなものではなく，各農家単位の零細量に過ぎなかったが，寒さの厳しい山地住民にとって木綿は耐久力にも強く，保温の点でも有難いものであったから，需要が盛んで，西讃地方の人々に聞くと阿波へは毎年多量に出たということである。紡績のできぬ以前３・４人の人夫が肩に担いで峠道を越えて運んだが，綿は「しの巻」で一丸（ひとまる）は二貫目あったが一人で６丸（ろくまる）ぐらい運ぶのが通常で峠を越えてきた綿は阿波で売り刷かれた。

又　讃岐から阿波藍の「藍こなし」に働くため阿波え来た讃岐男もあったが，讃岐男はよく働いたから賃金も高かったといい，そのためか「讃岐男に阿波女」の称もあって，阿波女の従順でよく働くのと並称されている。（別の解釈をする説もある。）

阿讃の峠道を越えた阿波と讃岐の関係・交渉は，言語のアクセントにも表われているが，その一例として高松市のことを阿波東部では，タカマツとカを強く高く発音するが・讃岐や阿波の上郡（かみごおり）（美馬郡・三好郡）特に三好郡では，タカマツとマに力を入れて高く発音しており，其他，上（うへ），下（した）を発音するのも阿波では東部と西部ではアクセントが異るが，阿波の西部上郡と讃岐は相似しているなど，讃岐文化圏と阿波特に上郡との影響関係の頗る密接なるを感ぜしめる。

(8)

明治４年（1871）徳島県を改めて名東県とし，阿波淡路両国12郡を管轄するようになったが，越えて明治６年（1873）２月20日香川県を廃して讃岐12郡も名東県の管下に包含されたが，それは隣接している上に両国の関係が頗る密なるからであった。然し，間もなく明治８年(1875)９月，香川県は独立し名東県から分離して今日の行政区域の礎をつくった。

讃岐が名東県下にあった明治６年６月27日，　徴兵令による 国民皆兵制の告諭の中に示された「血税」という文字の誤解から西讃一円に暴動が起り，約 400ヶ所の村吏・戸長の宅・邏卒（らそつ）出張所・学校・掲示場などから人家約 200軒が破壊される騒動となり名東県庁からその鎮圧や報告指示の便を計るため急據大坂の峠道を改修したことなどは阿讃関係の一挿話となっている。

この暴動鎮圧後の取調には１ヶ月余もかかり，処罰されたもの約２万人余という大規模の騒擾であっただけに，その鎮圧に頗る手を焼いたのである。

又，明治３年，淡路洲本の家老稲田家の家臣達が本藩徳島藩から分離独立しようとして，徳島藩士の憤激を買い，稲田の本貫阿波脇町の稲田屋敷が襲われたとき，急遽清水越して讃岐領に入り，仏生山に至って高松藩に入り事情を具申救を求めたことがあった。これを稲田

騒動といい，この年が庚午（かのえうま）であったから庚午事変ともいう。一方，讃岐の農民が逃散して阿波領内に逃げこんだこともある。安政三辰年（1856）6月17日讃岐鵜足郡中通村百姓が造田村と13年間も山論が続き，大庄屋・役人の裁決に不服で，32人が越境して太刀野山に来り，後続部隊約50人も国境大川山に来て待機している事件が起って，三好郡東山村與頭庄屋大西記惣左衛門が郡代に早速注進したことがあり，その前年の安政2年には，讃岐丸亀領黒渕村百姓78人が三好郡白地（はくち）村へ逃散越境したことが足代村教法寺過去帳に見えている。

(9)

阿波第九代の藩主宗鎮（むねしげ）・十代蜂須賀共に高松藩から入って蜂須賀氏を継いでいる。以上のように，地理的位置の近接性から阿・讃両国の関係は頗る密接であったといえる。

昭和10年，国鉄高徳線・土讃線の開通があり（そのため昼間町では魚の移入が従前は徳島魚80%，讃岐魚20%だったのが昭和4年土讃北線の開通によって逆転し，讃岐魚80%，徳島魚20%となった）　国道32号線・193号線の道路改修と三好橋・穴吹橋の架設による自動車利用の進展（昭和22年塩江・穴吹間琴電バス開通）は峠道の往来を一層便利なものにした。

更に，電力の開発が盛んに進み，吉野川河水が阿讃山脈を貫ぬいて香川用水として利用されようとしつゝある事と共に阿讃の関係は従来の峠道利用よりも更に一層・規模を拡大しようとしている。

これは序説素描に過ぎぬもので，詳細は将来の研究調査に俟ち度いと思う　（昭和46・9・9稿）

主要参考文献

松浦　勝　　徳島県西部に於ける魚類輸送の漸移状況につきて

小野武夫　　日本村落史考

香西成資　　南海通記

荒岡一夫　　阿波北方の民俗

山口吉一　　阿波ええぢやないか

高松短期大学研究紀要

第　2　号

昭和47年3月1日印刷
昭和47年3月1日発行

編集発行　高松短期大学
高松市春日町

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町2158